

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007□ 2010

課題番号：19320124

研究課題名（和文） 北東アジア史からみた中世アイヌ文化形成過程の考古学的研究

研究課題名（英文） Archaeological studies in the formation of medieval Ainu culture:
From the perspective on the history of Northeast Asia

研究代表者

熊木 俊朗（KUMAKI TOSHIAKI）

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授

研究者番号：20282543

研究成果の概要（和文）：本研究では、古代から中世における日本列島の北方地域の社会変動について、特に中世アイヌ文化の形成過程に関する問題を中心に考古学的な検討をおこなった。具体的には、北海道東部地域を主な対象としてオホーツク文化の考古資料分析と擦文文化集落の発掘調査を行うことによって、この地域におけるオホーツク文化の終末とその後の擦文文化の展開・終末の過程を解明し、中世アイヌ文化が成立するまでの社会変化の実態を復元した。

研究成果の概要（英文）：This study is intended as an investigation of social changes of the northern part of Japan, Especially the formation of medieval Ainu culture, by the methods of archaeology. In this study we investigated archaeological materials of Okhotsk culture and excavated a settlement site of Satsumon culture in the eastern part of Hokkaido. From this survey we have seen the process of ending of Okhotsk culture and spreading and ending of Satsumon culture in this area, that is to say that we have seen the process of social change in the formation of medieval Ainu culture.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
2008年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2009年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2010年度	2,900,000	870,000	3,770,000
総計	12,800,000	3,840,000	16,640,000

研究分野：考古学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：考古学・先史学・北東アジア・中世アイヌ文化・擦文文化・オホーツク文化

1. 研究開始当初の背景

日本列島の北方史における大きな転換点が10～13世紀、すなわち古代から中世への移行期にあったことが、近年、考古学・文献史学の両面から指摘されてきた。そしてそれは東北・北海道という枠組の中だけではなく、東アジア世界全体で同時に生起した広域の変動として理解すべきものであることが、近年の研究により判明しつつあった。

この時期の東北・北海道は、考古学的には擦文文化から中世アイヌ文化への移行期に

相当する。そこでは交流・交易の発展を軸として、高度な政治経済社会が形成されてゆく動きが急激に加速する。具体的には、東北部における手工業生産の発展とそれに伴う交易の拡大、流通経済の進展に伴う生業の専業化・組織化、防御性集落の構築に見られる社会の緊張関係の高まり、北方のオホーツク文化の吸収・融合とサハリンへの拡大などがそのような現象として認められてきた。また文献史学では、この時期、「蝦夷」に対する中央国家の認識に変化があったことが指摘

されていた。すなわち、この時期に認められる「蝦夷」の呼称の変化（「エミシ」から「エゾ」へ）は、「蝦夷」の見方が「国外」の異民族集団へと変化したことを反映したもので、それは北方社会を中央と対峙する集団として認めざるを得なかったこととして理解されていたのである。

交流・交易の発展を背景として生じた上記のような中央と辺境社会との関係の変化は、日本列島の北方のみならず北東アジア地域全体でも生じていたものであった。それは、東アジア諸国とその北方に位置する「少数民族」集団との関係の変化などにあらわれており、北方社会の発展とそれに伴う中央の政策の変化が指摘されてきた。例えばこの時期の中国の史書に記された「骨嵬」（クイ）などの名称は現実の民族名称に即したものと考えられるし、さらには元と骨嵬の戦いも記録されるなど、交易網の拡大とそれを背景とした摩擦の激化が認められていたのである。古代から中世への移行期に生じたこのような変化は、大局的には唐の滅亡後、宋を中心として成立した経済新秩序を背景としており、朝貢・交易を軸とする変化として東アジア世界全体の枠組で理解する必要があった。

研究代表者はこのような広域的背景を視野に収めつつ、日本列島と北東アジア地域との関係解明に重点を置いて、この時期の北海道とその北方地域との交流に関する考古学的研究を遂行してきた。そこには北海道内やロシア極東での発掘調査も数多く含まれており、成果の一部は、熊木俊朗・福田正宏編『間宮海峡先史文化の復元と日本列島への文化的復元』（東京大学常呂実習施設・ハバロフスク州郷土誌博物館、2005年）や、宇田川洋・熊木俊朗編『居住形態と集落構造から見たオホーツク文化の考古学的研究』（東京大学常呂実習施設、2003年）などとして公表されている。代表者はこれらの研究の中で、北海道・サハリン・アムール河口部にかけて広がる「オホーツク文化」の解明を通じて、古代における北海道とその北方地域との交流様態を明らかにしてきた。オホーツク文化とは5～9世紀の環オホーツク海沿岸地域に展開する考古学的文化であり、アムール下流域ないしサハリンに起源を有するいわば「外来の」文化である。すなわちオホーツク文化は、日本列島史において縄文時代早期以来閉ざされていた、「北からの文化の道」を復興させた特異な例ともいえる。そしてこの文化の集団は、アイヌ文化の直接の祖先となる北海道在地の「擦文文化」との交易を活発に行っており、中世アイヌ文化の成立にも多くの影響を与えたと考えられてきた。

しかしながら、この時期に確立された大陸との交流様態が次の中世ではどのようなかたちに変化し、それが北東アジア史の上でい

かなる意義をもつのかについては、多くの問題が未解明のまま残されてきた。具体的には、オホーツク文化集団の一部を吸収しながら交易体制を強化する擦文文化の動態や、その擦文文化の終末と中世アイヌ文化の成立過程を、北東アジアとの交流史と関連づけながら解明することがそれに相当する。この問題に関しては、特に中世アイヌ文化などには資料的な制約があったために研究はやや低調であったが、研究の蓄積が全くなかったわけではもちろんない。例えば本応募者が所属する東京大学常呂実習施設でも1980年代には擦文文化の調査を重点的に行い、データの蓄積を図ってきた。しかしそれらの研究は土器編年の整備や住居・集落の実態解明といった基礎研究の段階に留まっていた部分も多く、本文冒頭に述べたような問題意識に基づいた成果にまで到達し得たものは限られていた。すなわち近年の北東アジア史研究の問題意識に照らして日本列島の北方史研究を見直すならば、広域的な交流・交易の発展を軸とした視点から中世アイヌ文化の形成過程を捉えなおす必要性が痛感されていたのである。

2. 研究の目的

本研究課題では上記のような背景と経緯を踏まえ、古代から中世への移行期における日本列島の北方地域の社会変動を考古学的に解明することを目的とした。具体的には、オホーツク文化と擦文文化に代表される古代の北海道の先史文化から、いかなる過程を経て中世アイヌ文化が形成されるのかという問題を、周辺社会の動向と対比しながら明らかにすることが主な検討課題となった。

これまで、日本列島の北方史の研究においては東北と北海道南部・中央部の関係が中心に論じられ、北海道東部以北の研究は主に資料不足が足枷となり停滞していた。本研究では発掘調査や未報告資料の再評価等によってデータの整備を図り、この問題を克服することを目指した。これは資料の空白を埋めると同時に、北方史研究の射程をさらに北や東に拡大する役割をも果たすことになると期待された。

3. 研究の方法

（1）遺跡発掘調査による擦文文化の展開過程の解明

擦文文化によるオホーツク文化の吸収・同化のプロセスを解明する際には、折衷文化である「トビニタイ文化」の存在が重要視されてきた。しかし両文化が「融合」ではなく「交替」する地域の問題やその背景はこれまで見過ごされてきた感があった。本研究課題では両文化の遺跡が入れ替わるように交替する

北海道北見市の常呂川下流域の遺跡群に注目し、そこで発掘調査を実施することにより、この地域における両文化の集落間の関係や移行期の様相を解明し、両文化の関係について新たな側面から光を当てることとした。

(2) オホーツク文化に係る考古資料の分析・公開

オホーツク文化の終末過程を解明するにあたって、研究の最大の障害となってきたのが未報告資料の存在である。これについては、網走市教育委員会が所蔵する網走市最寄貝塚の資料や、東京大学総合研究博物館が所蔵する北千島出土資料、稚内市が所蔵する稚内市シュプントー遺跡の資料を対象として、分析と資料の公開を行うこととした。

さらに、東京大学常呂実習施設がそれまで調査を行ってきた北見市トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点に関して発掘調査を継続するとともに、データを整理して分析を行い、特に終末期のオホーツク文化の集落形態について研究をおこなうことにした。

(3) アイヌ文化に係る考古資料の調査

近世以前のアイヌ文化の社会構造について理解を深めるため、アイヌ文化の「砦」の跡であるチャシ跡遺跡について発掘調査をおこない、この時期の儀礼や居住形態に関するデータの収集と分析を実施した。調査対象は、やはり東京大学常呂実習施設がそれまで調査を行ってきた北見市トコロチャシ跡遺跡である。

4. 研究成果

(1) 遺跡発掘調査による擦文文化の展開過程の解明

オホーツク文化と擦文文化の関係や、擦文文化の終末過程に関するデータを収集するため、北見市大島2遺跡にて擦文文化の竪穴住居(1号竪穴)の発掘調査を実施した。本遺跡は周辺の擦文文化集落にはない立地上の特徴、すなわち標高の高い丘陵上に位置するという特異な遺跡であるが、これまで発掘調査はおこなわれてこなかった。今回、初めて発掘調査をおこなった結果、以下の2点が明らかになった。

①擦文文化後期(11世紀後半前後)の竪穴住居を含む集落遺跡であること。

この点については、大島2遺跡の存続時期が、周辺の標高の低い擦文文化集落とほぼ同時期であることを明らかにした成果である。すなわち、常呂川下流域では標高の高い地域の開発も、オホーツク文化の撤退後におこなわれたことが判明した。これは、オホーツク文化の撤退が擦文文化の直接的な圧力によるものではないことを示唆するデータの一

つとして解釈が可能であり、両文化の関係を考える上で重要な意味を持つと評価できる。

②廃絶時に火を受けた焼失住居を含んでいること。

この点については、焼失住居は常呂川より西側の低地における擦文文化集落遺跡ではあまり認められない特徴である一方、常呂川の東側では相対的に高い、というこれまでの傾向を迫認する結果となった。住居の焼失はオホーツク文化で頻繁に認められる現象であるとともに、アイヌ文化の「家送り」儀礼にも繋がる現象として注目されており、アイヌ文化の形成過程に関する議論に一石を投じる成果となった。これらの成果の一部は下記の学会発表②として報告されている。

(2) オホーツク文化に係る考古資料の分析・公開

東京大学総合研究博物館に所蔵されている、鳥居龍蔵によって採集された千島列島出土考古資料について資料調査を実施した。調査では、未報告資料を含む全ての資料に対して図化・計測等によるデータ化をおこなった上で、考古学的観点からの分析と評価を試み、成果は下記の図書⑥として刊行した。現在、千島列島は領土問題等で調査が困難な地域であるため、戦前に採集された本資料は現在でも基本資料としての価値が高いのであるが、未報告のものも多く実態には不明な点が多かった。それらを明らかにしたことは重要な成果である。

網走市モヨロ貝塚の資料については、過去の未報告資料について、特に土器を中心にデータを収集し、その成果に基づいて最近の発掘資料に対し分析と編年をおこなった。成果は下記の図書④として刊行されている。

北見市トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点に関しては、住居の建て替えパターン、墓域の形成などを中心とした居住形態に関するデータの収集と分析をおこなって、拠点的な集落とそうではない集落間にある性格の違いや、サハリンから北海道への人の動きについて論じ、オホーツク文化の展開と終末過程に関する議論に新たな展開をもたらした。成果は下記の学会発表③で報告されている。

稚内市シュプントー遺跡の資料については、1966年の調査で出土した資料を対象として正確な図化と今日的な視点からの再評価を行い、オホーツク文化終末期における宗谷海峡を挟んだサハリンと北海道との交流の様相を、より具体的なかたちで解明した。成果は下記の図書⑦として刊行されている。

(3) アイヌ文化に係る考古資料の調査

北見市トコロチャシ跡遺跡に残っているアイヌ文化期の砦跡の「壕」について、未発掘部分の調査を行い、壕の形態の全容を復元

するとともに、「貝送り」の儀礼がチャシ跡の壕内でおこなわれていたことを初めて明らかにした。これらは近世アイヌ期に関する成果であるが、中世アイヌ期の資料が空白となっている現状では、近世以前の時期の実態を類推する資料として重要な意味を持つ。この成果は下記の学会発表②で報告されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ①熊木俊朗、中世のサハリン、アジア遊学、査読無、107巻、2008、pp.98-107
- ②熊木俊朗、特集『続縄文文化の特色』総論、北海道考古学、査読有、46輯、2010、pp.1-8
- ③熊木俊朗、環オホーツク海地域をめぐる古代の交流、Ship & Ocean Newsletter、査読有、No.246、2010、pp.6-7

[学会発表] (計3件)

- ①高橋健、山陰地方・西九州地方の骨角製銚頭について(紙上発表)、第56回埋蔵文化財研究集会、2007年9月1日、和歌山県海南市市民会館
- ②熊木俊朗・山田哲、北見市トコロチャシ跡遺跡・大島2遺跡調査報告(2008年度・2009年度)、第11回北アジア調査研究報告会、2010年3月13日、石川県立歴史博物館
- ③熊木俊朗、北海道東部のオホーツク文化集落について、北海道考古学会2010年度研究大会、2010年4月24日、北海道大学学術交流会館

[図書] (計7件)

- ①高橋健、北海道出版企画センター、日本列島における銚頭の考古学的研究、2008、289p.
- ②熊木俊朗(共著)、北海道斜里町・斜里町教育委員会、知床の考古、2008、pp.140-148
- ③熊木俊朗(共著)、六一書房、地域と文化の考古学Ⅱ、2008、pp.39-54
- ④熊木俊朗(共著)、網走市教育委員会、史跡最寄貝塚、2008、pp.480-492
- ⑤熊木俊朗(共著)、同成社、比較考古学の新地平、2009、pp.709-718
- ⑥熊木俊朗・高橋健(編)、東京大学大学院人文社会系研究科附属常呂実習施設、千島列島先史文化の考古学的研究、2010、106p.
- ⑦熊木俊朗(共著)、北東アジアの歴史と文化、2010、pp.297-313

6. 研究組織

(1) 研究代表者

熊木 俊朗 (KUMAKI TOSHIAKI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授

研究者番号：20282543

(2) 研究分担者

大貫 静夫 (ONUKI SHIZUO)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：70169184

(3) 連携研究者

佐藤 宏之 (SATO HIROYUKI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：50292743

福田 正宏 (FUKUDA MASAHIRO)

東北芸術工科大学・芸術学部・講師
研究者番号：20431877

臼杵 勲 (USUKI ISAO)

札幌学院大学・人文学部・教授
研究者番号：80211770

國木田 大 (KUNIKITA DAI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・助教
研究者番号：00549561

(2010年度より連携研究者)

高橋 健 (TAKAHASHI KEN)

横浜市歴史博物館・学芸員

研究者番号：20451776

(2008年度まで連携研究者、2009年度から研究協力者)